

ラーニング・サポーター ♪ 8月のつぶやき -JWUラーニング・コモンズさくらより-

図書館2階 JWUラーニング・コモンズさくら(以下「さくら」と略)では、学科・専攻推薦を受けたラーニング・サポーター(本学大学院生)が学修相談を受け付けます。学修相談以外にもミニ講座の開催や「さくら」の活動支援をしながら、感じたこと、思ったことを「つぶやき」、本学学生の皆さんに学修相談に訪れてもらいたいと思っています。ラーニング・サポーターは「さくら」で皆さんをお待ちしています！

<8月のつぶやき♪INDEX>

p.1 光芒一闪 @T.K.(関連文化論専攻博士課程後期3年) 8月27日 tweet!

p.1 8月のおすすめ展覧会と推し本 @K.W.(生活環境学専攻(被服学)博士課程後期3年) 8月19日 tweet!

つぶやき1 ♪ 光芒一闪

夏の風物詩の一つ、花火。今年も全国各地で花火大会が行われ、多くの人の記憶を彩るものになったことと思います。幼い頃、夏になると家で花火をすることが楽しみでした。また、2017年に公開されたアニメ映画「打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？」のタイトルも印象的でした。残念ながら、鑑賞の機会には恵まれませんでした。当時放映されていたCMを通して、印象的な題名が記憶に刻まれています。

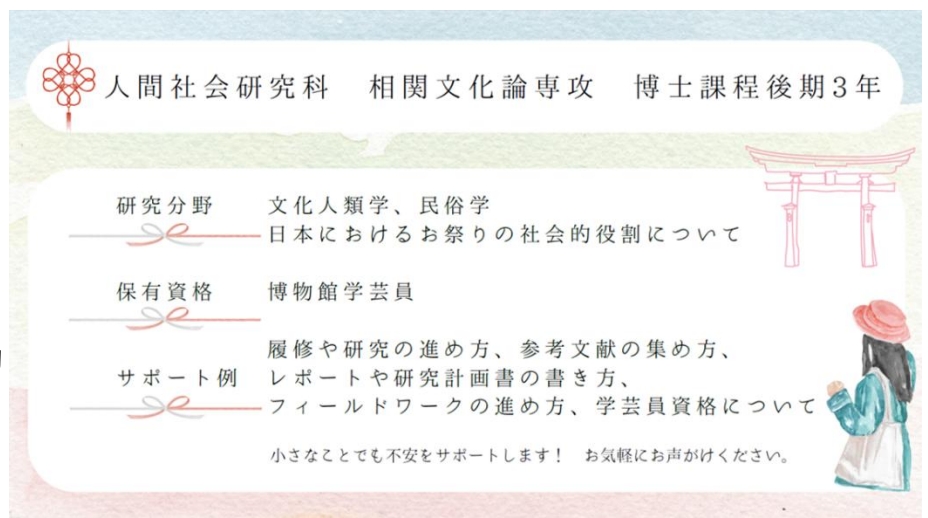
東京の花火大会といえば、隅田川花火大会が思い浮かぶ方も多いのではないのでしょうか。諸説ありますが、その起源は徳川吉宗が死者供養と災厄除去を祈願し、享保18年(1733)5月28日に行った「両国川開き」といわれています。

両国の花火は、夏の娯楽として親しまれるようになり、裕福な人は屋形船から、庶民は橋の上から楽しみました。例えば、歌川豊国の『両国花火之圖』(19世紀)には、両国橋を大勢が行き交い、各々が花火を見上げたり、屋形船を見つめたりしている様子が描かれています。屋形船では、立ち上がって声を出す人、優雅に煙管をふかす人、三味線を弾く芸者なども描かれ、豪華な花火見物の様子が見て取れます。

また、歌川広重の「江戸名所水のおもかげ」の一作品『両国花火』(1852)には、屋形船から水面に映る花火を見ている人々が描かれています。とても粋な彼らですが、実際の花火見物がどこまで忠実に再現されているのかは、残念ながら分かりません。ただ、函館や長崎、神戸など、港が有名な夜景スポットになることが多いのは、水面に映る光が印象的だからかもしれませんね。

最初の「両国の川開き」から16年後の1749年、海を隔てたイギリスでは、ヘンデルによる『王宮の花火の音楽』が上演されました。花火の轟音に負けずに、管楽器主体で作曲されたこの曲は、アーヘンの和議の祝典のために、当時のイギリス国王ジョージ2世が依頼したものです。花火だけではなく、音楽でも華やかさを演出しようとしたところは、日本の花火文化との違いが垣間見えて興味深いですね。

ウォーカープラス公式HPの「全国花火大会特集」によると、今後開催される花火大会は全国で170件以上あるそうです。一瞬で消えてしまう花火の光をどう楽しむか。先人の知恵を拝借して、違った楽しみ方をするのも一興かもしれません。それでは、また来月。



人間社会研究科 関連文化論専攻 博士課程後期3年

研究分野	文化人類学、民俗学 日本におけるお祭りの社会的役割について
保有資格	博物館学芸員
サポート例	履修や研究の進め方、参考文献の集め方、 レポートや研究計画書の書き方、 フィールドワークの進め方、学芸員資格について

小さなことでも不安をサポートします！ お気軽に声がけください。

つぶやき2 ♪ 8月のおすすめ展覧会と推し本

7月に引き続き、今回も夏休みにぜひ足を運んでいただきたいおすすめ展覧会と、それにあわせて読みたい推し

本をご紹介します。

ロンドンのV&A美術館から巡回し、今夏横浜美術館で開催されている「マリー・アントワネット・スタイル」展は、18世紀フランスの王妃マリー・アントワネットのファッションを中心に、彼女の「スタイル」に焦点を当てた展覧会です。私は早速見に行ったのですが、衣服はもちろん、家具やジュエリーなど貴重な品々が多く展示されていて、非常に見応えのある展覧会でした。特に18世紀の服飾や扇などの調度品は現存する史料が限られており、展示することで傷む可能性があることから（扇は開く度に傷んでしまうのだそうです。）、特に日本では実際に目にする機会がなかなかありません。本展覧会では、当時の衣服や生地、素晴らしい扇の数々を間近で目にする事ができ、さらに彼女の「スタイル」が後世にどのような影響を与えたのかを理解することができる、非常に貴重な展示です。また、マリー・アントワネットが民衆にどのように捉えられていたのかを理解する風刺画や、彼女の命を絶ったとされるギロチンの刃など、夢のような華やかな生活の裏にあった暗い側面にも焦点が当てられている点に注目です。

そして、この展覧会のお供にぜひ読んでいただきたいのが、内村理奈教授（本学被服学科）の『マリー・アントワネットの衣裳部屋』（2019）です。同書は、マリー・アントワネットがブルボン家に嫁ぐ前から亡くなるまでを服飾を通して丁寧に読み解く一冊です。彼女の花嫁衣装から死の直前の装いに至るまでを辿るのみならず、後世における影響にも言及しており、まさに今回の展覧会にぴったりの一冊といえると思います。絢爛な服の表からは見えないポケットとその中身や、服飾職人、最後の衣裳まで、展覧会をより深く楽しむことのできる内容が詰まったこの本と一緒に、展覧会に足を運んでみてはいかがでしょうか。

人間生活学研究科 生活環境学専攻

自己紹介

博士課程後期3年 西洋服飾史

本学 家政学部 被服学科（学部）卒業

本学 家政学研究科 被服学専攻（修士課程）修了

研究対象

19世紀フランスの衣装を中心とする装いに関する研究

ひとこと

授業や課題、卒論に関することなど、大学生活の中で困ったことがあった際には、お気軽にご相談ください！



ラーニング・サポーターのつぶやき（2026年8月）

ホームページ https://lib.jwu.ac.jp/lib/lc_ls.html

編集：JWU ラーニング・コモンズさくら